

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K02205

研究課題名(和文) アディクションのある親とその子どもに対する支援プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of support programs for parents with addiction and their children

研究代表者

森田 展彰 (Nobuaki, Morita)

筑波大学・医学医療系・准教授

研究者番号：10251068

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：依存症の親とその子どもに対する心理教育資料を用いた講座をおこない、その効果や注意点を確かめ、それを基にその使用の手引きや援助者に対する研修プログラムやそれに用いる動画資料を作成した。一般の親の調査で、アルコール使用障害のリスクの高い群、特に気分障害・不安障害を伴う事例では否定的な養育や子どもに情緒行動の問題が高い割合であることを確かめた。虐待事例の調査でその重症度や再発リスクに、依存症や精神障害は関係していることを確かめた。

以上から、虐待予防において親のアルコール依存症や精神障害の有無やそれが子育てに与える影響に関する親の認識をもとに、心理教育を含む介入を導入するという手順を提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では「依存症の親やその子どもに対する心理教育資料」を用いたプログラムの有効性の確認、研修プログラムや使用の手引きの作成を行った。こうした手法は日本では個別の試みのみであったので、多くの人が使えるエビデンスのあるツールができることで親の依存症が子育てに与える悪影響を減らすことが期待される。またこうした事例への介入の必要性について改めて確かめるために一般家庭と虐待事例と2つの異なるサンプルで、依存症が問題となる子育てや子どもの情緒行動の問題に与える影響を確認した、特に依存症に気分障害・不安障害が重複した事例で深刻な状況があるというのは新しい知見であり、学問的に価値がある。

研究成果の概要(英文)： I conducted a course using psychoeducational materials for parents of addicts and their children, confirmed their effectiveness and points to note, and based on this, created a guide for their use, training programs for practitioners, and video materials for use in these programs. In a survey of general parents, we found that negative parenting and emotional and behavioral problems in children were more common among those at high risk for alcohol use disorders, especially those with mood and anxiety disorders. A survey of abuse cases confirmed that addiction and mental disorders are related to their severity and risk of recurrence.

Based on the above, we proposed a procedure for abuse prevention in which interventions, including psychoeducation, are introduced based on an assessment of parents' perceptions of the presence or absence of alcoholism and mental disorders and their impact on parenting.

研究分野：精神医療

キーワード：依存症の親 子育て支援 児童虐待 精神障害の心理教育

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

アディクションのある養育者は、アルコールや薬物、ギャンブル、買い物等への耽溺や、併存する精神症状、生活困難などから、適切な養育行動をとることが難しいこと、アディクションの親をもつ子どもはその影響を受けることで心理的、行動的、認知的、社会的な問題のリスクが高まることがわかっている。こうした状況にある親子の支援については、(a)親子の交流の機会をつくること。(b)支え合う親同士、子ども同士などのピア間の交流の場をつくること、(c)依存症や子育ての知識を伝えること。(d)必要な支援につなげることという4つの支援的要素を取り出している。日本で行われている介入としては、海外と比べて少数であるが、成増厚生病院で行われているアルコール依存症の人の子どもに対する「子どもグループ」が行われているが、広く使うことができる心理教育のツールはない。そこで研究代表者らはこれまでに、成増厚生病院のプログラムを参考に、同様の内容を多くの医療機関などで簡便に親や子どもに提示できる資料を作成してきた(森田展彰ら：アディクションのある養育者に育てられる子どもが求める支援, 日本アルコール・薬物医会誌; 2020: 55: 92)が、その効果は未確立であった。また、こうした資料を、どのような事例にどのような手順で導入していくかという課題が残っていた。

## 2. 研究の目的 本研究には以下の2つの目標がある。

1. 研究代表者らが従来作成した依存症のある親と子どもへの心理教育資料を用いたプログラムの開発と普及。開発の一貫として、有効性の効果を確認する。また、心理教育プログラムの研修プログラムの普及のための研修プログラムを作成する。
2. 養育者の依存症が、親子関係や子どもに与える影響をあらためて確かめて、こうした親子への支援のポイントをまとめ、その中で心理教育プログラムを用いた支援のガイドラインを作成する。

## 3. 研究の方法

### (研究1) 依存症の親とその子どもに対する心理教育資料を用いたプログラムの開発に関する研究

#### 研究1-1. 心理教育を用いたプログラムを用いた心理教育プログラムの有効性に関する検討

精神病院で依存症治療を受けている患者に以下の内容の心理教育資料を用いた講座を行い、その後にアンケートに答えていただいた。

- (養育者用の内容)** 1.アディクションが子どもや子育てに与える影響を知る、2.自分のアディクションのことを子どもに伝える時のポイント。3.お子さんが、アディクションの問題がある中でも、自分を大切にするために伝えるべきこと。これをまとめた「たいせつ」(た：たよる、たすけをもとめよう、い：いろいろな気持ちを話そう、せ：あなたのせいではない、つ：つらいときはごほうびをあげよう)について一緒に話す。
- (子ども用の内容)** 1.お父さんがアルコール依存症の子どもが主人公の物語を示す。親の飲酒やそれに伴う家族の葛藤の状況で、子どもが悩んでいると、フクロウのキャラクターがでてきて、それはアルコール依存症という病気であること。だからその問題は子どもの生ではないこと、治療をすれば回復できることなど教えてくれる。2.アディクションの問題がある中でも、子どもが自分を大切にするために伝えるべきこと。これをまとめた「たいせつ」(養育者用と同じ内容を子ども用にわかりやすくしたもの)について説明する。

**(研究1-2) 心理教育資料を用いた介入に関する援助者に対する研修プログラムの開発：**援助者に対する心理教育資料を紹介し、実際にその使い方を教える研修プログラムを作成した。また、研修に使用する2種の動画(心理教育資料の内容説明する動画と、この資料を援助者が親や子どもに使用する場面のロールプレイングの動画)を作成した。こうしたプログラムと動画を用いた研修会を2度開催し、参加者からフ

ードバックをもらった。

**(研究 1-3) 心理教育資料の使用における手引きの作成**：研究 1-1 と研究 1-2 の所見をもとに、心理教育資料の用い方について、援助者および養育者に対する手引きを作成した。

## **(研究 2) 養育者の依存症の影響の調査をもとにした依存症のある親とその子どもの評価と予防的介入のポイントの抽出**

**(研究 2-1) 一般の親におけるアルコール依存症・精神健康障害が子育てや子どもの情緒・行動の問題に与える影響に関する研究**：アルコール使用障害のある親が養育困難になることは指摘されている。一方、アルコール依存症と他の精神健康障害の合併例いわゆる重複障害が 30%以上存在しており、特にうつ病との合併は自殺につながるものが指摘されているが、養育に及ぼす重複障害の影響は調べられていない。一方、養育困難と親の精神障害の研究では、産後うつ病の研究は主になされているが、アルコール依存症の研究は乏しい。このギャップを埋めるため、本研究では、アルコール使用障害およびその重複障害が子育てや子どもに与える影響を調べた。具体的には、調査会社により収集された 5 歳以上の子どもを持つ親に対して、オンラインで質問紙調査をおこなった。調査内容は、CAGE (アルコール使用障害のスクリーニングテスト、K6 (気分障害や不安障害をスクリーニングテスト、PNPS (肯定的否定的養育行動尺度)、SDQ (子どもの情緒や行動の尺度) である。CAGE の得点が 2 点以上のアルコール依存症の疑いがある群を、「アルコール使用障害群」とし、K6 得点が、13 点以上の群を「気分障害・不安障害群」とした。またこの両群の重複状況から、どちらにも入らない群、アルコール障害のみ群、気分障害・不安障害のみ群、両方に入る群を分けた。以上の分類の上で、PNPI のサブスケールの高得点群、SDQ の各サブスケールの High need 群の占める割合について比較した。さらに、アルコール使用障害や気分障害・不安障害の有無や重複状況に加え、子どもの性・年齢、親の性・年齢、職業、経済状態を説明変数として、PNPI 及び SDQ による群に入ることを目的変数とした多重ロジスティック回帰分析を行った。

### **(研究 2-2) 児童虐待事例における、養育者の依存症や精神障害と、虐待状況の関連**

本研究の目的は、児童虐待事例において、養育者の依存症や精神障害の有無と虐待の重度化・再発の関係を明らかにすることである。対象者は、平成 30 年 5 月 14 日～31 日に、全国の児童相談所に虐待通告された事例の記録に関する調査を施行した。収集された事例 7637 例のうち、虐待の可能性が確認され、親の精神障害及び養育者や子の性・年齢等の基本的情報の不足がない 4229 例を分析とした。なお、この調査は、全国児童相談所長会と共同で行ったものであり、筑波大学医の倫理委員会の承認を得て行った。調査項目は、基本的背景、養育者の依存症や精神障害、虐待の深刻さの指標 (**児童相談所で使われている虐待の重度分類**、一時保護実施の有無、虐待再発の可能性、以前の虐待通告の有無) その他の虐待に関連する育児状況 (両親の離婚や別居、社会的孤立、子育てへの嫌悪感や拒絶感) である。

### **(研究 2-3) 依存症や精神障害が子育てに与える影響の自覚に関する心理テストの開発**

養育者自身が依存症や精神障害を持つ場合に、自分の子育てや子どもに与える影響をどのように認識しているかを評価する「依存症や精神障害が子育てに与える影響の自覚に関する尺度」の作成を行った。対象やそのデータ収集は研究 2-1 と同じである。

## **4 . 研究成果**

### **(研究 1) 依存症の親とその子どもに対する心理教育資料を用いたプログラムの開発に関する研究**

#### **(研究 1-1) 心理教育資料を用いた講座の効果の検討**

講座は4か所の医療機関で計9回施行した、全参加者は66名であり、そのうちアンケートの回収した55名を分析した。参加者の性別は、男性48名、女性6名、無回答1名で、平均年齢50.3歳で、年齢の範囲は28歳から78歳であった。子どもの年齢は、回答は15名のみで、回答内容は0-4歳が1名、5-9歳2名、10-14歳は4名、15-19歳6名、20歳以上は3名であった。冊子の効果に関する質問の回答は、「依存症が子どもに与える影響の理解」（よくわかった50.9%、少しわかった45.5%）、「依存症について子どもと話しあうことの重要性の理解」（よくわかった60.0%、少しわかったは29.2%）、「冊子の有用性（役立つ52.7%少し役に立つ36.4%）」、「子どもとアディクションについて話しやすくなる」（とても話しやすくなる34.5%、少し話しやすくなる56.8%）と肯定的な回答が多かった。冊子に関する意見の自由回答を聞くと、「わかり易い」、「伝え方が大事とわかった」、「家族の大切さを感じた」などの肯定的な評価があった一方で、思春期版や成人版や支援の体制などが必要だという意見やその他の批判的な意見（文字が多すぎて読む気にならない、物語りではなく、実際にあった家族を事例にした方がいい）も見られた。

### （研究1-2）心理教育資料を用いた介入に関する援助者に対する研修プログラムの開発

援助者に対する心理教育資料を紹介し、使い方を教える以下の研修プログラムを作成し、実際に2度研修会を行い、参加者にフィードバックをもらった。

1. 依存症の親が子どもに与える影響に関する講話 30分から1時間
2. 心理教育資料の内容の説明（心理教育資料の内容を読み上げた動画の使用）
3. 実際に心理教育資料を用いるワーク、親用の心理教育資料を用いて、親と子育てについて話すロールプレイ（ワーク1）と、援助者が、子ども用の心理教育資料を用いて、親Aと子どもBに話す場面のロールプレイ（ワーク2）を行う。（援助者が心理教育資料を用いる場面の動画をみせる）
4. 援助者自身が用いたい事例への応用について話し合い、その事例に関するロールプレイを行う。

### （研究1-3）心理教育冊子の使用マニュアルの作成

研究1-1，研究1-2をもとに、心理教育冊子の使用方法や使用上の注意をまとめた手引きを作成した。

## （研究2）養育者の依存症の影響の調査をもとにした依存症のある親とその子どもの評価と予防的介入のポイントの抽出

### （研究2 1）親のアルコール依存症・精神健康障害と、子育て・子どもの精神的問題との関係の研究

主な結果としては、CAGEによるアルコール使用障害のリスクの高い群（以下アルコール使用障害群と呼ぶ）は10.6%で、K6得点が13点以上の気分障害・不安障害のリスクの高い群5.0%で重複群は、3.8%であった。アルコール使用障害の有無と、気分障害・不安障害の有無の間関係を調べると、表2-1-3のようになった。アルコール使用障害のある群の方が、ない群よりも気分障害・不安障害がある群の割合が有意に高かった（2検定、 $P < 0.001$ ）。5歳以上の18歳未満の子どもを育てている一般の親において、アルコール依存症のリスクの高い群と5歳以上の子どもを育てている親において、アルコール使用障害のある親は、それがない親にくらべると否定的な養育の人の割合が多く、子どもに情緒行動の問題がある事例が多い。アルコール使用障害がある群は気分障害・不安障害を伴う事例が多く、これらが重複した場合には、さらに否定的な養育の事例や子どもの情緒行動の問題のある事例を生じる可能性が高い。一般の親の子育て支援やにおいて、アルコール依存症や気分障害・不安障害のスクリーニングをして子育てや子どもへの影響について評価したり、支援を導入することが虐待の1次予防、2次予防につながると

いえる。特に重複診断がつく場合は、ハイリスクであり、アルコール依存症やうつや不安に関する治療が必要になることが示唆された。

### （研究2-2）児童虐待事例における、養育者の依存症や精神障害は、虐待の重大性や再発の可能性の関連

全国の児童相談所に通告された児童虐待事例を分析した。精神障害のあるケースは全体の4分の1で種類別では気分障害が10.6%と最も多く、次いで依存症3.9%であった。精神障害のあるケースは、精神障害のないケースと比較して、虐待の程度が重い、再発しやすい、一時保護されている、夫婦仲が悪い、社会的に孤立している、子どもに対して嫌悪感や拒絶感がある、病気の家族の世話を子どもがしているなどの傾向が見られた。精神障害診断別に虐待・育児状況との関連をみると、依存症は、一時保護施設での保護、虐待の再発リスクの継続、以前の虐待通告、両親の離婚や別居、社会的孤立と有意に関連していた。精神障害の治療や相談を受けたことがあるケースは、精神障害あり群全体では41.7%、依存症のある事例の場合は32.5%で低い割合であった。相談治療を受けている事例では、再発リスクの持続の割合が低いことが示されており、依存症の事例に対して、積極的に評価し、治療への導入を行っていくことが必要であることが示唆された。

### （研究2-3）依存症や精神障害が子育てに与える影響の自覚に関する心理テストの開発

親のアルコール使用障害と精神不調が自分の養育に与える影響の認識尺度(5項目)を作成した。探索的因子分析では、主因子法により、因子分析を行い、固有値1以下の基準により、1次元の因子が抽出された。クロンバックの $\alpha$ は0.928であり、十分な内の一貫性があることが確かめられた。各項目の得点を足し合わせた得点を「アルコール問題や精神的な不調による子育て困難得点」とした。この得点と、PNPSの「厳しい叱責・体罰」「否定的養育」、SDQの総合的困難さ、CAGE得点、K6得点との間に正の有意な相関見られた。各項目の肯定的な回答の割合を見たところ、アルコール使用障害のある群、気分障害・不安障害のある群では、養育や子どもに影響したという回答は2-3割程度であったが、5つの項目のいずれかと肯定している割合をみると、4割以上であった。重複群では、77.8%を占めた(下表参照)。この尺度を用いて、親自身が依存症やその他の精神的問題が自分の子育てに影響を与えていると認識を確かめることで、依存症や精神障害やその重複障害に関する治療を導入するチャンスが生まれる。そして、その介入の手法の1つとして、今回作成した依存症の親やその子どもに対する心理教育資料を用いることができる。

表 「親のアルコール使用障害と精神不調が自分の養育に与える影響の認識尺度」の項目内容と肯定的回答の割合(5歳以上の子どもを持つ一般の養育者のうちK6,CAGEで気分障害・不安障害または/およびアルコール使用障害のリスクがあるとされた群における結果)

	気分障害・不安障害の群 (N=510)	アルコール依存症の群 (N=348)	重複に関する分類		
			気分障害・不安障害のみ群 (N=384)	アルコール依存症のみ群 (N=222)	重複群 (N=126)
自分や配偶者の精神的な不調やアルコール問題のために子どもへの関りが十分持てない	137 26.9%	94 27.0%	67 17.4%	24 10.8%	70 55.6%
自分や配偶者の精神的な不調やアルコール問題のために子どもに感情的になってしまうことがある	146 28.6%	100 28.7%	81 21.1%	35 15.8%	65 51.6%
子どもは、親の精神的な不調やアルコール問題のことでストレスを感じていると思う	152 29.8%	102 29.3%	82 21.4%	32 14.4%	70 55.6%
子どもの方が、精神的な不調やアルコール問題がある親の世話をすることがある	95 18.6%	63 18.1%	63 21.4%	29 13.1%	58 46.0%
自分や配偶者の精神的な不調やアルコール問題で子どもに心配をかけていると思う	109 21.4%	87 25.0%	42 10.9%	10 4.5%	53 42.1%
上記のいずれか	228 44.7%	148 42.5%	130 33.9%	50 22.5%	98 77.8%

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 田中裕子、森田展彰、斎藤 環、大谷保和	4. 巻 31
2. 論文標題 精神的な問題を抱える親の養育困難に関する調査	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本社会精神医学会雑誌	6. 最初と最後の頁 328-343
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中裕子、森田展彰、斎藤 環、山口玲子、大橋洋綱、丹羽健太郎、櫻山豊夫：	4. 巻 24
2. 論文標題 全国児童相談所調査の虐待事例における精神疾患がある養育者の子どもの精神症状と問題行動の特徴	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 子どもの虐待とネグレクト	6. 最初と最後の頁 76-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森田展彰	4. 巻 40
2. 論文標題 家族問題としてのアディクション - 親のアディクションが子どもに与える影響とその支援を中心に -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 思春期学	6. 最初と最後の頁 86-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森田展彰	4. 巻 36
2. 論文標題 精神医療における養育者のマルトリートメントの予防や介入	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 精神科治療学	6. 最初と最後の頁 65-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森田展彰	4. 巻 23
2. 論文標題 特集にあたって-家庭内の暴力における加害的側面のある人への働きかけ-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 子どもの虐待ネグレクト	6. 最初と最後の頁 230-236
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yang Wenjie, Morita Nobuaki, Zuo Zhijuan, Kawaida Kyoko, Ogai Yasukazu, Saito Tamaki, Hu Wenyan	4. 巻 18
2. 論文標題 Maladaptive Perfectionism and Internet Addiction among Chinese College Students: A Moderated Mediation Model of Depression and Gender	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 International Journal of Environmental Research and Public Health	6. 最初と最後の頁 2748 ~ 2748
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3390/ijerph18052748	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yang Wenjie, Morita Nobuaki, Ogai Yasukazu, Saito Tamaki, Hu Wenyan	4. 巻 42
2. 論文標題 Associations between sense of coherence, psychological distress, escape motivation of internet use, and internet addiction among Chinese college students: A structural equation model	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Current Psychology	6. 最初と最後の頁 9759 ~ 9768
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s12144-021-02257-7	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤田 (道重) さおり、森田展彰、大谷保和、斎藤環	4. 巻 55
2. 論文標題 初犯男性受刑者に対するアルコールの問題に焦点を当てたプログラムの効果検証	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本アルコール・薬物医学会雑誌	6. 最初と最後の頁 245-260
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森田展彰	4. 巻 61
2. 論文標題 アタッチメント・トラウマの問題としてのアディクションの理解	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 童青年精神医学とその近接領域	6. 最初と最後の頁 488-494
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 森田展彰
2. 発表標題 児童福祉・子育て支援と依存症支援の連携
3. 学会等名 日本子ども虐待防止学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森田展彰、新田千枝、村瀬華子、田淵賀裕
2. 発表標題 精神障害のある養育者による虐待事例の特徴や支援状況-全国児童相談所への通告事例の分析
3. 学会等名 第59回日本犯罪学会総会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森田展彰、村瀬華子、田淵賀裕、新田千枝、ちゃこさん、めぐさん
2. 発表標題 アルコール依存を抱えるお母さん、お父さんとその子どもの支援
3. 学会等名 第6回関東甲信越アルコール関連問題学会茨城大会
4. 発表年 2022年



1. 発表者名 森田展彰
2. 発表標題 地方独立行政法人神奈川県立病院機構神奈川県立精神医療センター公開講座令和4年度依存症治療拠点機関設置運営事業依存症シンポジウム
3. 学会等名 アタッチメント・トラウマと依存症（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田淵賀裕、森田展彰
2. 発表標題 アディクションのある親とその子どもに対する支援～介入ツールを用いた親子プログラムの試み～
3. 学会等名 第63回日本児童青年精神医学会総会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森田展彰、新田千枝、村瀬華子、田淵賀裕
2. 発表標題 アディクションのある親とその子供に対する支援
3. 学会等名 日本アルコール・アディクション医学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森田展彰
2. 発表標題 児童福祉・子育て支援と依存症支援の連携
3. 学会等名 日本子ども虐待防止学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 森田展彰	4. 発行年 2022年
2. 出版社 医学書院	5. 総ページ数 15
3. 書名 助産学講座基 礎助産学(3) 母子の健康科学	

1. 著者名 森田展彰	4. 発行年 2022年
2. 出版社 医学書院	5. 総ページ数 15
3. 書名 基礎助産学(3) 母子の健康科学	

1. 著者名 森田展彰	4. 発行年 2021年
2. 出版社 医歯薬出版	5. 総ページ数 7
3. 書名 別冊・医学のあゆみ アルコール医学・医療の最前線2021 UPDATE	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松宮 透高  (Matsumiya Yukitaka)  (10341158)	県立広島大学・保健福祉学部(三原キャンパス)・教授    (25406)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	村瀬 華子  (Murase Hanako)  (40816089)	北里大学・医療衛生学部・教授    (32607)	
研究分担者	新田 千枝  (Nitta Chie)  (40868105)	筑波大学・医学医療系・学振特別研究員    (12102)	
研究分担者	新井 清美  (Arai Kiyomi)  (50509700)	信州大学・学術研究院保健学系・教授    (13601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関